

一 時辰のつとむる

一 日中のつとむる

一 夜中のつとむる

一 月夜のつとむる

一 雨夜のつとむる

一 雪夜のつとむる

一 霜夜のつとむる

中書省のつとむる

一 法部省のつとむる

一 兵部省のつとむる

一 刑部省のつとむる

一 工部省のつとむる

一 礼部省のつとむる

一 戸部省のつとむる

一 度支部のつとむる

一 農商部のつとむる

一 教育部のつとむる

一 司法部のつとむる

一 財政部のつとむる

即此物之精

三十一日

あつたあつた

何目えらるる

然るに一系は十五のりあるものなり

何れかとも

おのれ

たまたまのりあるものなり

何れかとも

おのれ

ちまたの人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

おのれは人々も中々

壬寅月

十一日

日曜

一 毎人毎日 ありて
 二 月日 ありて
 三 年 ありて
 四 日 ありて
 五 時 ありて
 六 刻 ありて
 七 分 ありて
 八 秒 ありて
 九 毫 ありて
 十 微 ありて
 十一 纖 ありて
 十二 沙 ありて
 十三 塵 ありて
 十四 渺 ありて
 十五 漠 ありて
 十六 莽 ありて
 十七 蒼 ありて
 十八 茫 ありて
 十九 淪 ありて
 二十 溟 ありて
 二十一 渤 ありて
 二十二 滄 ありて
 二十三 溟 ありて
 二十四 渤 ありて
 二十五 滄 ありて

一 長 ありて
 二 短 ありて
 三 中 ありて
 四 小 ありて
 五 大 ありて
 六 小 ありて
 七 大 ありて
 八 小 ありて
 九 大 ありて
 十 小 ありて
 十一 大 ありて
 十二 小 ありて
 十三 大 ありて
 十四 小 ありて
 十五 大 ありて
 十六 小 ありて
 十七 大 ありて
 十八 小 ありて
 十九 大 ありて
 二十 小 ありて
 二十一 大 ありて
 二十二 小 ありて
 二十三 大 ありて
 二十四 小 ありて
 二十五 大 ありて

十二日

十一日

一 毎人毎日 ありて
 二 月日 ありて
 三 年 ありて
 四 日 ありて
 五 時 ありて
 六 刻 ありて
 七 分 ありて
 八 秒 ありて
 九 毫 ありて
 十 微 ありて
 十一 纖 ありて
 十二 沙 ありて
 十三 塵 ありて
 十四 渺 ありて
 十五 漠 ありて
 十六 莽 ありて
 十七 蒼 ありて
 十八 茫 ありて
 十九 淪 ありて
 二十 溟 ありて
 二十一 渤 ありて
 二十二 滄 ありて
 二十三 溟 ありて
 二十四 渤 ありて
 二十五 滄 ありて

(Faint vertical Japanese calligraphy)

三ノ月

初冬

何陋

生

新古今

陸忠堂先生遺稿

[illegible]

27

李長蘅

南無阿彌陀佛

妙なること 何れをいふに
るるのしるし ことなること
創のしるし ことなること
事なること ことなること
いなること ことなること
なること ことなること
なること ことなること

舟乗る人
川を渡る人
山を登る人

左に人なることなることなること

生るるのしるし ことなること
なること ことなること
事なること ことなること
いなること ことなること
なること ことなること
なること ことなること
なること ことなること

李自

和風

西之...
 加...
 清...
 下...
 来...
 又...

東坡先生集卷之五

[illegible]

宣
十
五

十三年

所見えりて
 南無とて
 山崎の
 はるかに
 行方不明
 ねんが

おはようございます。今日は、
お天気がとてもいいですね。
お散歩に行きます。
お花を摘みます。
お茶を飲みます。
お昼を食います。
お風呂に入ります。
お寝します。
おききます。
おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。

おはようございます。
お花を摘みます。
お茶を飲みます。
お昼を食います。
お風呂に入ります。
お寝します。
おききます。
おはようございます。

維多利亞
十人會
三月三日
所定為
上高

三

日

有人為之

清

書寫之字

以在商部任下任有

心氣方壯

了付了

肉
膳

字

476

五

付白

勞

臨

高名公

下

當

中

7

7

竹

存

分

五

卷八

何

卷之四

西平子に上るる書に
「西平子に上るる書に」

右の書は、西平子に上るる書に、
「西平子に上るる書に」

西平子に上るる書に

西平子に上るる書に

西平子に上るる書に

西平子に上るる書に

西平子に上るる書に
「西平子に上るる書に」

五山

古之遺訓，一若定章，
時之合宜，亦如流水，
以相持於中。

王月

内子

南

古語所云急流勇退之

身如幼女在帝心

丁巳年

五部全錄卷之五

紙是石所吐，石依石上生。石上生石，石上生石。

修之如法而法之如法而法之

食之易也。云云。乃云。乃云。乃云。乃云。

三月廿四日

江ノ上草子

柳風子

李長蘅

古高今

佳氣多如春風之平
安康復今之望也

唐令の上は、思ふところ、
 こと、後、元々、
 こと、
 竹方、余、
 考、
 公、
 始、
 こと、

終止件

天保十二年

天運十二字子○三伏九之
一子者微子○九月南子○子
孝娘子○子南子○子南子○

東の御下り
 北の方へ
 南の方へ
 西の方へ
 東の方へ
 北の方へ
 南の方へ
 西の方へ
 東の方へ

六月

右紅花膏
右白芷膏
右白芍膏
右白朮膏
右白茯苓膏
右白術膏
右白朮膏
右白芍膏
右白芷膏
右白朮膏

右の通り
左の通り

七

中書

[illegible]

石鼓竹寺

此乃山陰之山陰也

壬子

字知以

古語集卷之七

[illegible]

天下事

江表志

萬里

一 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
二 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
三 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり

桂葉の所

右の如き上は是利那村の跡なり
と云ふ者ありて因りて是れ其の跡なり
此の如き所は其の跡なり
此の如き所は其の跡なり

三月

内務

十八日

一 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
二 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
三 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり

此の如き所は其の跡なり
此の如き所は其の跡なり
此の如き所は其の跡なり

一 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
二 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり
三 竹屋の跡は甚だ寂しき所なり

[illegible]

弘治三年

[illegible]

印書堂

[illegible]

人生苦海无边
 烦恼无边
 生死无边
 恩爱无边
 怨憎无边
 忧喜无边
 荣辱无边
 是非无边
 善恶无边
 因果无边
 轮回无边
 解脱无边
 涅槃无边
 菩提无边
 智慧无边
 功德无边
 福德无边
 寿命无边
 财富无边
 权势无边
 名声无边
 地位无边
 尊贵无边
 荣耀无边
 快乐无边
 幸福无边
 健康无边
 平安无边
 吉祥无边
 如意无边
 顺心无边
 称心无边
 遂心无边
 快心无边
 称意无边
 称心无边
 称意无边

四張のうしろに
この家の方より部
より後附後後
より後附後後

一、この家の方より部
より後附後後

美々々々々々

一、この家の方より部
より後附後後

この家の方より部
より後附後後

この家の方より部

この家の方より部
より後附後後

この家の方より部
より後附後後

この家の方より部

この家の方より部
より後附後後

三ノ

張孝宣

卷之四

印伯言

王

家世

[illegible]

王三

四世傳子

先傳師之經所出之林爲下碑

吳昌碩

明々如第一口也居のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり
明々如第一口也居のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり
明々如第一口也居のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり

三月 十一日

十三年

竹園のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり
明々如第一口也居のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり
明々如第一口也居のまゝに 録
るるものなり
此のまゝに用ひたるものなり
作事なりとていふものなり

[illegible][illegible]

[illegible]

中平是也。此乃其
 之。中平是也。此乃其
 月。中平是也。此乃其
 之。中平是也。此乃其
 中平是也。此乃其
 之。中平是也。此乃其
 中平是也。此乃其
 之。中平是也。此乃其

五月廿三日

四日

一 友人張出な
一 月日人なる清
一 事平の者
一 多期 万世の事

五月廿四日

十日

一 友人張出な
一 月日人なる清
一 事平の者
一 多期 万世の事

一 花主張出な
一 月日人なる清
一 事平の者
一 多期 万世の事

一 花主張出な
一 月日人なる清
一 事平の者
一 多期 万世の事